

12. つどう3：社縁

菊地暁 folklore.lecture@gmail.com

* 「社縁 (association)」 もしくは 「近代的」 社会関係

- ・ 身分 status から契約 contract へ (H. J. S. Maine 1822-88)
- ・ ゲマインシャフト Gemeinschaft / ゲゼルシャフト Gesellschaft (F. Tönnies 1855-1936)
- ・ 機械的 mecanique 連帯から有機的 organique 連帯へ (Emile Durkheim 1858-1917)

→ 社会の多様化・複雑化・機能分化 / 選択機会の拡大 = 選択リスクの増大？

* 前近代・近代「民俗学の場合」

- ・ 社縁の前近代：「仲間」いろいろ、交通・通信システムの制約 → 前近代的「社縁」は「地縁」の延長か
- ・ 「出版資本主義 print capitalism」と「想像の共同体 imagined community」(B. Anderson 『想像の共同体』)
- ・ 民俗学雑誌の「紙上問答」

『郷土研究』(1913-18)、『民族』(1925-28)、『民俗学』(1929-33)、『民間伝承』(1935-83)、『日本民俗学』(1953-)

- ・ 日本民俗学講習会 (1935) (民間伝承の会 → 日本民俗学会)

* 社縁の現在1：オンライン・コミュニティ

- ・ 「インター」ネット前史：パソコン通信
- ・ APPAnet (1969) から Windows95 (1995) へ
- ・ テキストベースのコミュニティ：2ちゃんねる、『電波男』(2005年映画化)
- ・ ブロードバンド化 (2000's ~) : youtube (2005~)、twitter (日本 2006~)、facebook (日本 2008~)
- ・ スマホ (2007~) の普及、「いつでも・どこでも」 → 「即レス」と「既読スルー」の地獄？
- ・ 「炎上」の日常化…「ネットがエンパワーしたのはマニアとヘンタイとクレーマーである」

→ 思考と発話の抑制、知的活動の停滞、大学のみならず社会にとっての本質的な脅威

* 社縁の現在2：国家の行方

- ・ 新自由主義の名の下に：公的補助の削減 / 公教育の劣化 / 格差の拡大 / 監視国家化
 - ・ 福祉国家と産業資本主義：「均質な国民」の量産が大量生産・大量消費を基本とする産業資本主義と合致
 - ・ ポスト・フォーティズムの国家像：一握りの「ハイスpek人材」と「その他大勢」の分断
 - ・ 近代的「法治」の崩壊：法文の恣意的運用、文書記録の破棄、法の下での平等の形骸化…国家の私物化？
 - ・ 反知性主義・象徴的貧困・ポスト真実：合法的手続きによる合法的国家の解体、氾濫する「愛国」物語
- グローバリズムの猛威 / コミュニティの崩壊 / モダニティの機能不全 → 来たるべき社会組織とは？

[文献]

木村直恵 1998 『<青年>の誕生：明治日本における政治的実践の転換』新曜社

北田暁大 2005 『嗟う日本の「ナショナリズム」』日本放送出版協会

山岸俊男 2011 『「しがらみ」を科学する：高校生からの社会心理学入門』ちくまプリマー新書

菊地暁 2017 「<BBS>の片隅で：身体・写真・インターネット」田中編『フェティシズム研究3 侵犯する身体』京大出版

の情緒的飛躍と密接不可分の関係にある。しかし、コスモポリタンの世界では、考え方の違う人どうしの日常的な交流が、これまで以上に親密になる。人々は、自分自身そして相手に対して、少なくとも暗黙のうちに、自分の信ずるところを正当化する必要にせまられる。

伝統を喪失した社会において、宗教的儀式や式典を維持しつづけるには、それらを徹底的に合理化する作業が欠かせない。もちろん合理化は、あつて当然のことではある。

凍結した自主性というワナ

だがしかし、伝統の役割が変わるに伴い、私たちの人生に新しいダイナミズムが仕込まれるようになる。それは、人間行動における自主と強制を両極とする縦軸と、コスモポリタニズムとファンタジメンタリズム（原理主義）を両極とする横軸の上でくり広げられるダイナミズムと要約することができる。

ひとたび伝統が撤退してしまつと、私たちの人生は、選択肢の多い、したがつて熟慮が欠かせないものとなる。自主と自由が尊重されるようになり、伝統のもつ隠然たる力

は、より開かれた討論と話しあいにおきかわる。

ところが、自由の獲得は、別の問題の引き金となる。自然と伝統が終焉した社会——ほとんどの欧米諸国がいまやそうである——では、日々の生活においてすら個人に意思決定が求められるようになる。

意思決定のどこが問題なのかというと、中毒と強制がつきまとうという点である。おもしろいけれどもやっかいな事態が展開しつづけるのだ。そのほとんどが先進国に限つてのことなのだが、発展途上国の富裕階層にも、それが顕在化しつづける。

ここで私が言いたいのは、中毒の現状とその認識についてである。もともと中毒という言葉は、アルコール中毒と麻薬中毒に限って用いられてきた。しかし、いまや人間活動のあらゆる領域において、中毒が顕在化しはじめた。仕事、運動、食事、セックス、そして愛情にさえ、人は中毒しかねない。

なぜそうなのかというと、これらの活動をはじめ、さまざまな人間活動のありようが、かつてのように伝統と慣習によつて縛られなくなつたからである。

伝統と同じく中毒もまた、過去が現在におよぼす影響である。伝統がそうであるように、中毒にもくりかえしが欠かせない。ここでいう過去は、集団のそれではなく個人のそれである。なぜくりかえすのかというと、それは不安ゆえのことである。

中毒は凍結した自主性だと私は考える。脱伝統化が進む過程において、人間の行動を以前よりも自由化する力が働く。ここでいう自由化とは、過去の束縛から人間を解放放つことを意味する。人が中毒におちいるのは、自主的であるはずの選択が、不安ゆえに硬直化してしまうからである。

伝統を重視する社会では、人々が共有する信念と感情を通じて、過去が現在を設計する。中毒もまた、過去の束縛のもとにある。しかし、過去は過去でも、過去に自分の意思で自由を選択したライフスタイルの習慣から抜けだせないがゆえに、彼または彼女は中毒におちいるのである。

うすらぐアイデンティティ

世界中いたるところで、伝統と慣習の影響力は低下しつづける。そのため、私たちの

自己同一性（アイデンティティ）——自分を他人と差異化しようとする意識——はうすらいだ。

伝統が重きをなしておれば、共同体における個人の社会的地位は安定しており、そのことが自己同一性のよすがとなる。伝統がすたれて、各自がライフスタイルを自由に選択するようになると、自我の確立を避けて通れなくなる。人々は、これまで以上に能動的に、自己同一性の構築ないし再構築にはげまなければならない。だからこそ、欧米諸国で、さまざまなセラピーやカウンセリングが繁盛するようになったのである。

近代的な心理分析の創始者であるジグムント・フロイトは、神経症の科学的治療法を確立したとされているが、彼の業績は、脱伝統文化の初期の段階で求められる、自己同一性を刷新するための処方確立したことにある。

結局、フロイトによる心理療法の新規性は、主体的に未来を切り開くために、自分の過去を再点検することにあつた。欧米社会に広まるセルフヘルプ・グループについても、同じことがいえる。たとえば、匿名アルコール依存症のセルフヘルプ・グループに参加